

日展ニュース

No. 177

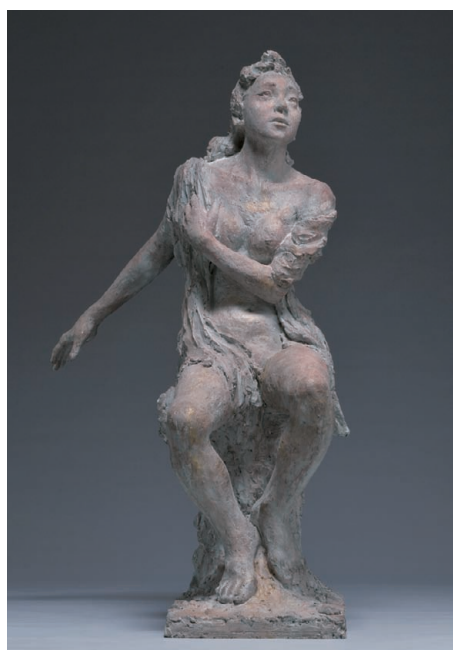
<http://www.nitten.or.jp/>

令和3年1月30日発行

編集兼発行人 土屋 禮一

特集

改組 新 第7回日展



改組新第七回日展を終えて

公益社団法人 日展

理事長 奥 田 小由女

日展は、明治四十年の文展から数えて今年は一三三年を迎えました。本来ならば東京オリンピック・パラリンピックの開催される華やかな年に合せて、第七回日展は開かれるところでしたが、突然の世界中を巻き込む新型コロナウイルスの蔓延によってオリンピックは順延となり、数多くの秋の公募美術展の中止・延期が相次ぐ中、日展はどうなるのか注目の的となりました。日展は、日本画・洋画・彫刻・工芸美術・書の五部門からなる大きな美術団体のため、五科の先生方と話し合い、国立新美術館の協力を得て、展覧会を開催させて頂くことになりました。

コロナ禍、密になることを避けるため、恒例のオープニングパーティー、開会式、各科の祝賀懇親会、会期中のイベント、「日展の日」等は、残念ながら中止と致しましたが、厳しい状況下で制作に取り組んだ日展五科の渾身の作品を社会に向けて発表する公募美術展として開催し、お蔭を持ちまして無事に東京会場を終えることができました。

今回展の開催に当たり、ご支援、ご協力を賜りました皆様に、心より御礼申し上げます。

二〇二〇年
改組新第七回

日展受賞者一覧

大臣賞

日本画	文部科学大臣賞	夏の夕	河村源三
洋画	文部科学大臣賞	ヒトリ	桑原富一
彫刻	内閣総理大臣賞	曙	楠元香代子
工芸美術	内閣総理大臣賞	風通り抜ける岩壁	藤田仁
書	内閣総理大臣賞	岸本調和の句	永守蒼穹

東京都知事賞

日本画	東京都知事賞	草宴	岸野圭作
洋画	東京都知事賞	秋くるる	丸山淳一
彫刻	東京都知事賞	私は飛びたい	山谷口
工芸美術	東京都知事賞	神々の座・那智	山岸大成
書	東京都知事賞	蘇東坡詩	井上清雅

日展会員賞

日本画	日展会員賞	早春	池内璋美
洋画	日展会員賞	窓辺にて	小川満章
彫刻	日展会員賞	やすらぎ	櫻井真理
工芸美術	日展会員賞	撓屈「瀝V」	待田和宏
書	日展会員賞	ゆく春	木村通子

特選

第一科《日本画》

暮れゆく	天野澄子
林檎	石崎誠和
黄昏の緋色	高井弘明
返信のないメール	立花大聖
刻ノ痕跡	田中達也
朝境に	谷野剛史
誘いの日	辻野宗一
秋の詣	西坂省三
初詣	宮原壯之助
日輪讃歌	行近

第二科《洋画》

マイナスの世界	池上わかな
悠久への想い	池田茂
キャンバスを前にして	吉川典
マツ	佐藤京子
冬の隣	佐藤洋子
手・GA・MI	志水孝司
History	武石英男
いにしへの舞	本田年男
白い刻	山本佳子
人形劇	米澤玲子

第三科《彫刻》

臥ゆ	秋田美鈴
木洩れ	奥森日向子
大洩れ	近藤哲夫
東雲の湖	志萱州朗

樹想
追風をつかんで
誰も知らない空の果て

重政 信明
高橋 忠
田中 宏典
丹羽 俊揮

第四科《工芸美術》

「志向」その先	金井伸弥
Okura rockets	近藤卓浪
象嵌彩暁の景	近藤学
未来への兆し2020	斎藤卯乃
躍り動	竹河いみ子
始ま	富岡大資
今を歩む	繁昌孝二
青の領域	藤藁隆
宙ありき	松木光治
翔	山口和子

第五科《書》

弘育	石川青邱
島崎藤村の詩	川合玄鳳
糸桜	川上鳴石
承顔接辞	辻敬齋
戯楽	角田大壤
山たかみ	長井素軒
杜少陵詩	中村史朗
山たかみ	藤川翠香
清たかみ	牧野聖雲
楊柳枝詞	山内香鶴

座談会

「コロナ禍における日展」

出席者

理事長 奥田 小由女

副理事長 事務局長

第一科 日本画 審査主任

土屋 禮一

第二科 洋画 審査主任

佐藤 哲

副理事長

第三科 彫刻 審査主任

神戸 峰男

第四科 工芸美術 審査主任

春山 文典

第五科 書画 審査主任

新井 光風

司会 中村 伸夫

(日展ニユース委員)

令和2年11月13日(金)
於 国立新美術館 地下一階

審査室D



司会 司会を務めます第五科の中村伸夫でございます。よろしく願います。

今回は「コロナ禍における日展」というテーマでご意見を伺いたいと思います。

まずはじめに、奥田理事長から、今回の日展の鑑審査について、全体的な観点からご発言をいただきたいと思っています。

審査全般について

奥田理事長 今回の改組 新第七回の日展は、開催できるかどうかというのが最初の大きな問題でございました。秋の公募展は、大きい団体がたくさんございますけれども、みんな中止を発表されまして、コロナがいかに変なことからという状態でした。どうしても秋の日展はやりたいたいということで、皆さんに協力を得ました。コロナ対策を徹底して、開会式を中止したり、レセプションを中止したり、いろいろ密になることを避けて、その上で鑑審査を行って、展覧会だけは開くということを決断するまでが、やはり大きな問題だったと思います。

でも、皆さん、ちゃんと心得てくださいまして、鑑審査にはいつ

奥田 小由女



もと変わらずきつちりと、臨んでくださいました。

昨日、授賞式がございましたが、各科の受賞された方の授賞式は、滞りなく開かせていただきました。一度に行うのではなく、密にならないように二部に分けて、開かせていただきました。

司会 どうもありがとうございます。

次に、事務局長の土屋先生から、今回展の搬入から審査終了までの状況あるいは例年との違い、そしてコロナ禍におけるどのような対応を方針として実施したか、というところにつきまして、願います。

土屋事務局長 理事長のお話しの通り、皆さんの意志でよく開けたなと思っております。

搬入の数は一万一千余りで近年

と、そんなに変わりませんでした。それで今年はいつもと同じくらい三〇一八点の作品数が陳列されたというのはまずよかったなと思っております。

コロナがまだ世の中で関心を持つ前でしたけれども、ある美術雑誌で、これからの団体展のあり方という座談会がありまして、とても僕は印象深く読みました。その中に日展のことがかなり議題に挙がっていました、日展というのは毎年審査員が変わるが、これは他の団体では到底考えられないというのです。いわゆる日展は主義・



開会後の文化庁長官

主張を大事にしてきた団体ではなくて、多彩な作風の集合体ということもあってだと思いますが、審査員もそれこそ一七名、外部を入れても二〇名以下です。二〇〇、三〇〇名が審査員の会もありますので、考えられないことだといわれますね。

これは先輩たちの知恵だったと思うのですが、日展はそういう意味では広くいろいろな作品を集めようということ。審査員一七名の責任のようなものが自然に表に出るということです。

今回も審査員の数が限られたということ、他の団体は無理だったけれども、日展だけは結果的に先輩の英知を生かす事ができたのだなと思ひ、それを感謝しております。

司会 ありがとうございます。

ここからは、一科の土屋先生より各科の主任をされた先生方へ、お願いいたします。

土屋事務局長 このコロナ禍でどの様な感じの作品が集まるのか、本当に心配でした。日本画は、若干の作品の少なさはありましたが、これからの日展のために大切な作品もあるわけですから、今回、外部の審査員の先生方も含めて、みんなで審査方法について共感で

きる話し合いを、十分やりまして、「ああしまった」ということがないように、第一審から、後で後悔がないよう一票でも手が挙がったものを残しました。

その後も僅差の作品に対しては特に大切に話し合いながら、丁寧な審査を心がけ、初めての審査員の方々を含め全審査員、納得の方で審査を終えることができたと思っています。

こういう時期だから、かえってじっくり取り組んだいいものが多いくて、むしろそれはちょっと感動的でした。「モティーフ」の語源は動機という意味ですけども、とにかく日本画の場合、モティーフの広がりがとてもあったということとは、ありがたいなと思いました。入落とは係りなく、自分の考えをしっかりと深く掘っていかうという、若い世代の作品の表れだと思ひます。そういう意味でも、幅広い作品がたくさん取れたと思ひつています。

結局、価値のある新しいものを僕たちは見つけようとしているわけですけども、新しいということとは、決して時代の問題じゃなくて、モティーフと作家がいかに深く関わっているかの問題だと思ひています。そんな意味で、これか

ら日本画の行く末を託すに足る若い人たちが、何人かは賞にもつながりましたし、入選もできました。自分の動機に向かつて、しっかりと頑張ってくれるような人の精進を祈っております。

司会 二科の佐藤先生、お願いします。

佐藤 まず最初に、何と云っても日展が開けたということ、これが非常にすばらしいことで、ただけみんなが前向きになったか。日本中が落ち込む中で、前向きにやろうという、この形は、やはりすばらしいことだし、それが実際



洋画会場



できたということですから、これは大変なことだと思います。日展がもし開催されなかったら、日本の文化は終わりという、極端な話、そのぐらいになると思いますよね。

このコロナ禍の中を出品しようという前向きな方がいらっしやいましたので、今年はちょっと多く入選にしました。ですから、二段掛けが多くなりましたけれども、皆さんが非常に前向きに取り組んでおられる、それがよくわかりました。

審査員の方にお願ひしたことは、絶対にいい作品を落とさない、それを実行してもらいました。どの審査員も真剣に考えてやってくださったことがよくわかります。

また研究会として、批評を互いにやり合ったり、そういう相互

研鑽ってありますよね。それが今年はやっとできなかったかな。そういう意味で、少々作品で気になる点がありました。

作品の並べ方ですけれども、いつもの通り、洋画は一室に審査員と特選の方。特選は絶対によくないといけないということで、胸を張って出せる作品を用意したつもりです。

あと、二室、三室とこれからの方が出ていて、五室が中心で、六室もベテランの方がたくさんいます。あと十二室に割と新人の方を入れました。一番最後の部屋が二十三室なのですけれども最後の部屋に実は洋画はいい作品を集めました。

司会 三科の神戸先生、お願いします。

神戸 第三科は、応募点数が大きく減りました。これはまさにコロナの影響をもろに受けたんだなということ、リサーチする中で感じました。

というのは、彫刻はつくるときに広いスペースが必要なんです。ね。若い作家は、出身大学や研究所等で、広いスペースを借りる形でつくっていらっしやる方が多いんです。彫刻をつくるためには、三カ月から五カ月という制作期間

が必要ですが、今年は一切そういった研究施設が使えなくて、やむなく出品ができなかった方が多かったということが、よく理解できる状況だったような気がいたします。

そんな中で、今年、いつもよりも二〇%ほど、応募者の数が減りました。さあそこで、どうしようか、審査員の先生方と鑑審査前に話し合ひまして、やはり日展の作品レベルを下げないことを基本的にしようということで、審査、鑑査に入らせていただきました。

結果として、去年よりも相当数低く、二〇%ぐらい下がって、六六点が入選になったということです。

ここで少しでも下げますと、「この程度で入選か」ということが、彫刻の場合は非常にはつきりと目に見える形で作品に表れてくるんですね。だから、そういうことのないことが大事であろうと、審査の先生方も皆さん意見が一致したところでございます。

ただ、今回、そんな中でも頑張る若い作家が増えてきたなどということは感じました。学生さんでも特選に入ってきております。後で聞いたところ、普段なら教室の広いところや、夏休みに開放しても



らったところでつくっているけれども、今年は自分のアパートで、六畳間に、寝る布団を敷くこともできないような状態で、その中で作品をつくって、制作台の下で寝たというような方もいらっしやいました。そういう方たちが実にハイレベルな充実した作品をつくって出品してくださったことが、私たち審査をするに当たって、逆にこういう状況の中でも出品してくれた人たちがいたのだなということに、とても感銘を受けたところです。

会場の作品展示についても点数

が減ったのが功を奏してか、会場が風通しのよい構成になりました。彫刻というのは密になりますと、作品が見づらいということがありますが、今回はそういうことも少なく、会員を含めて全部で二百数点の展示ですけれども、とても作品が見やすくなっていると思います。

コロナ禍というものをマイナスだけに考えないで、来年に向けてよりいい作品づくりの第一歩にしようという思いで、出品者全員が来年の第八回展に向けて意欲を持っていたのだと思います、そんなふう



工芸美術会場

に思っております。

司会 四科の春山先生、お願いします。

春山 まず、今回展を開くに当たって、一番心配したのは、果たして一般の出品者の搬入がどれくらいあるのかと。コロナ禍のために、春は恐らくほとんどの公募団展が中止となり、結果的に作家が発表するのは一年ぶりということになったわけです。一年ぶりで果たしてどういうふうになるのかなど。

各地域によって非常にコロナに対する温度差がありまして、東京にいたるところと気がつかないような深刻な状況も、各地から聞かされました。結果的に搬入数は六四五点と、昨年とほぼ同数でした。そのうち、入選が四四九点と、昨年に比べて約二〇点増となりました。

陳列総数が五七八点、これも例年より多くしたわけですが、これも、ほぼ問題はないと思います。

審査状況についてですが、こういう状況下において出品された方に対して、愛情と熱意を持って審査に当たろうということ、できるだけ丁寧に見ようということ、とくに力を入れました。

もう一つ、工芸の場合、特に日本中で工芸が盛んになってもらいたいという日展においての使命があるのではないかなと思っております。日本各地の工芸作家を奨励といいますか、多く育ててもらいたいという使命も感じまして、その点も審査の時には皆さんにお願いしました。

特選については、各審査員に推薦してもらい、一堂に並べたわけですが、それでも、ご承知のように、分野が非常に広いわけです。陶磁があつて、漆、金属、染色、人形、竹、籐とか、結果、五つの分野から特選が出ております。

あと、会場構成ですが、これも、美術館の方からコロナ対策のために一方通行にしてほしいという、非常に難しい課題が出たわけなのです。工芸の場合は、立体作品、



春山 文典

壁面作品がありまして、陳列して結果的に、会場を見た場合、大した混乱もなく自然と動線ができているなということを感じております。

来年以降、この反動がないように願っております。出品者が、これをマイナスではなくプラスのほうに動いてくれれば何よりだなと思っています。

司会 五科の新井先生、お願いします。

新井 今回の総搬入数は八四三一点で、前年より若干減少したのですが、今回はコロナ禍であつて、これはどう考えてもやむを得ないことだったと考えております。むしろ、今日のこのコロナ禍で、社会生活が極めて困難な中で、それに立ち向かって出品された出品者の情熱というか、努力というか、あるいは日展を愛する気持ちというか、そうしたものに感謝をしたという気持ちのほうに勝っているような気がします。

今回の日展の審査についてですが、コロナ感染予防対策をどうするか、ここから全てが発せしました。

係主任が事細かに万全の準備と工夫をされておまして、そのおかげで、審査員全員は従来通り審査に専念することができたと思います。

彫刻会場



先ほど神戸先生もおっしゃったように、高齢化に対する防ぎというのは、新入選のところがひとつのポイントですね。ですから、この新入選の方々に対してどういうふうに勉強していったらいいのかということも考えていかないと先ほど佐藤先生がお話しになっていた研究会も大切なことです。

それから、特選が一〇点以内と決められているのですが、工芸の場合、一〇分野ぐらいあります。各分野から一点というわけにもいきませんし、どこかに偏っていいけませんし、特選に惜しくも漏れ

た人も、限りなく特選に近いということですから、我々は、それを陳列のところで工夫して、あえて特選のところに並べて、特選以外にもこれだけ優秀な作品があるのだよと、それを陳列で工夫しているわけです。

新井 書の場合でも、今までの先生方のお話のように、互いに批評し合う日常的な研究会が続けられれば、さらに質は高まっていくことが考えられると思うんですね。

しかし、コロナ禍の中でよくこういう作品を制作されたなということ、鑑賞者は日展を知らんになつて、恐らくそのことに力づけられる人は少なくないんじゃないかと思えます。私も会場を見て、とにかく人間ってすごいなつて、コロナに立ち向かう姿勢がよく伝わってきました。これも展覧会の持っているすごさだと思います。

土屋事務局長 お話が出ていた若い人の研究会という問題も、未来のためにはもう一回みんなで考えなければいけないことだと思います。

司会 前半の議論を総括する形で、奥田理事長から最後のお言葉をいただきます。と思います。

奥田理事長 今回、コロナ禍ということ、日展も非常時という

ことになったわけでございますが、日展は五科ある、非常に珍しい大きな団体でございますよね。今回も五科ある日展だからこそ、こんなふうにするばらしい七回展を成し遂げることができたのではないかなと、強く感じます。

コロナ禍の非常事態でも、お互いに助け合うといえますか、自分たちの科のレベルをしっかり保つたままに進めたいということ、それぞれの五科の先生方が本当にすばらしい審査をされたという感じがいたしております。

五科が本当に力を合わせて、このコロナ禍の状況でも、ちゃんと展覧会を開いて、作家の発表する場を失わないで続けていくという情熱が、それぞれの科の審査主任の先生方にもおありになったと思うのです。

こういう非常時にも、私たちは力を合わせて進んでいけるといことが、今回、本当に確信できました。日展の会員の人たちが、一般の応募する人たちが、日展に参加してよかったというふうに感じてくださいような日展でありたいと思います。日展を開くに当たって、そういう思いを持っていただけたらというのが、一番の願いでございますけれども、この非常時

に先生方に努力していただいたことに、本当に感謝しております。

コロナ禍における

公募展の在り方

司会 ありがとうございます。続けて後半に移らせていただきます。

他の公募展の多くが中止になった中で、今回、日展が開催されました。コロナ禍での開催にかかわる様々な問題点や対応方法等に関するしましては、これまでの前半の議論の中で具体的にお話しをいた



島村元文部大臣来館

きました。

以上の議論をふまえた上で、後半は「コロナ禍における公募展のあり方」という、かなり大きなテーマですが、このテーマで議論を進めたいと思います。公募展の一つである日展のみならず、日本の公募展が、今後こういう社会状況の中でどのような働きをすべきか、という観点からお話を伺えたらと思います。

まずはじめに、奥田理事長からお願いいたします。

奥田理事長 例えば、私ども工芸のほうでは、伝統工芸の作家四〇名と日展の工芸作家四〇名で、初めて一緒にになりました。東京国立博物館の表慶館で日本博の工芸展を開いておりますけれども、これはやっぱりすばらしい展覧会だったと思うのです。それも日本博としては初めて開けた展覧会で、その前に企画してあった他の展覧会は、コロナ禍のために開くことができなくなつて、私どもの工芸展が初めての催しだったわけなのです。担当者の方などが、展覧会というのは、こういう非常時になると、一八〇度頭を切り替えないとやっていけないほど大変なことなのですよとおっしゃっていました。

開けなかった展覧会は、全部映

像で皆さんにオンラインとかいろいろな方法で放映し、世界にも発信したりして、報告されたいと思いますね。

日展も来なくても来られない方とか、作家の場合も、入選を果たしているのだけれども、地方の方などは家族の反対で日展を見ることができないという方がたくさんいらっしゃるわけですね。ですから、今回は全体を映像で撮っていただいて、なるべく早く一般公開するようにということをお願いしたのです。そういうふうにもっと開かれた感じで外に発信していかなければいけない時代が来るのではないかというふうに思っています。

日展は発表の場を守り続けて、社会に対して美を届けるという心持ちで皆さんがこうやって展覧会をやっているわけですから、できるだけ外に向けてこれからは発信していきたいなと思っております。

司会 ありがとうございます。ここからは、奥田理事長のご提言を受けまして、再び各科の先生方に、お願いしたいと思います。

土屋事務局長 奥田先生のお話は極めて重要なことですね。個人的ですけれども、この春の展覧会で新日春展が中止になったもので

日本画会場



島さんになっていかれた時期で、ちょうど戦争を跨ぐ大変な時代なのです。だから、絵を出すこともないし、あの時代が、牛島さんのものになつてゐるのだなというようなことを思います。作家の気持ちとしてはコロナ禍を通して、もう一回一人一人が物をつくる喜びに帰ることも、大事なことがあるという気がいたします。

佐藤 私たち作家として、前向きな気持ちだけならいいのですけれども、中にはこれを機にもうやめよう、そういう方も随分いらっしゃるのです。ですから、作家として自由に描くという本当の姿が、今できるはずなのですから、もう、もうでない人もいます。そういう人をもっともっと引き止めなきゃいけないのですが、非常に難しいところですよ。

神戸 美術の世界は、生きるために必要だと言いつつも、現実的には不要不急の対象になつております。でも、その不要不急の大切さというものを、やはり日展は訴えていかなければいけないんじゃないか。

この一〇〇年余の日展の流れを見ますと、この五〇年、美術そのものが非常に多様化してきて、また日展も一方向ではなくて、まさ



に先ほど奥田先生がおっしゃったように、幅広く多様化したと思うのですね。それをよしとして、それが強みになって日展が存在してこれたんだと思うのですが、彫刻に限って言えば、この多様性を認めながらも、美の源流というのでしようか、その鮮度が保たれていくことが、日展の存在になるのではないかなと思っておりますし、そうでなければいけないのではなかなという気がするのです。では、源流って何だろうということをおっしゃるのですが、日本で開催される日展ですから、そこ

での出品作家たちの歴史観ですとか、造形観、それから表現力、技量、力量、さらに言えば作家が育った風土、これらのものが作品にどう表現されてきているかというところを日展がくみ上げて審査していくという、この姿勢が失われてきて、数がそろえばいいということだけにたまってはいけません。最も大切なものを、そこを守っていくというのが、日展の将来につながるのではないかな、そんなことを思っております。

若い作家をどう育てるかという問題が話題になっておりますが、そのことを守って、「それど日展だね」と言わないように、たくさんさんのグループ公募展がある中で、「さすが日展だね」と言われるような存在を保つことが、最終的には若い作家を引きつけるのではないかな。流れにばかり乗っていかないで、流れに倅差することも必要かもしれないし、流れをより速くすることも必要かもしれません。春山 若い方たちをどう育てるかという問題ですけれども、とにかく見て知る、作品に触れるということが一番大事なのですね。ですから、今の巡回展を見ていると、今回の巡回展は三カ所ですよね。名古屋、大阪、京都だけ。い

わゆる例年回っているところだけです。

これは財政的には不可能かもしれないけれども、各科数点でもいいですから、日展というのはこういうことだよというものを、もう少し日本を広く見て、その三大都市以外にも、日本海側の都市数カ所とか、九州はどこか毎年工夫して、できれば一〇カ所ぐらいキャラバンみたいに回って、全国で日展を見ていただく。あわせて、それを補充するには、映像等を使って各地でデモンストレーションをするとか、講師を一、二名派遣して、もうちょっと宣伝していただくとか、今後、巡回展に手を挙げるところだけを待つのではなく、こちらからも積極的に仕掛けるということも必要で、今後若い作家を育てるとか、本展・巡回展の相互作用とか、こういうことにもつながってくるのではないかなと、思っております。

新井 日展の活動、それから日展の芸術を広く外に向けて発信するということは、これはとても重要なことだと思います。ですから、その点ではリモートを大いに活用して、役立てる必要があるかと思っています。しかし、リモートですべてができるかというと、そうでもな

いということも感じます。私も大学の授業を離れてからもう十何年たって、現状のことはわかりませんが、書の実技など芸術系のものは、リモートでは肝心のところがつかめないと私は想像しております。例えば、作品から発する一番重要な「気」だとか、「響き」だとか、「生命感」とか、こういったものは、リモートでは伝えることが非常に難しいと思っています。

特に、芸術を鑑賞する面では、今のように広く使うことはできませんが、これから学ばなければならない人たちが、作品を制作する立場ですが、そこから考えると、リモートでは肝心なものとはつかめないと私は思っております。現物を見て、現物からなると感じることが不可能だということとは人間にはあると思うんで



すね。それがやっぱりリモートでの問題だと思うので、何かいい方法が別にあるのかなのか、これから考えていく必要があるのかなと、そのように思っているところがあります。

奥田理事長 展覧会というのは、さっき先生がおっしゃったように、本当にじかに作品に触れ、その作家の感動みたいなものをじかに受け取るというのが一番ベストだと思えますので、本展というのがすばらしいものになるのが一番だと思うんですね。巡回展というのも、いろいろな問題で、だんだん制約ができてきて、なかなか難しいというのもございますけれども、とにかく本展をできるだけ多くの方に見ていただくというのが一番だと思うんです。そこで本物に触れて、皆さんが感動してくださって、若い人が増えてくれば、一番ありがたいなというふうに思っています。

今回は、こういう非常時の中で、コロナ禍という大きな問題がある中で、皆さんが本当に力を合わせて、ここまで展覧会が開けたということは、すばらしいことだと思います。ぜひ少しでも多くの方に生の芸術といえますか、本物を見ていただく努力をしたいと思っ

おります。

そしてコロナの終息の後には、先程のお話の様に出来るだけ多くの会場で日展の巡回展を開催して頂きたいですね。

土屋事務局長 今回の日展でも一つ感じたことは、作品の見せ方の工夫ですね。奥田先生がおっしゃった工芸の部門でも、須弥壇のように、特選の作品が、きれいな漆のものや竹のものが並んで、手前の作品と向こうの作品の相乗効果というのがとっても印象深いです。彫刻も並べ方ひとつでかわりますし、さっき新井先生が「気」とおっしゃったけれども、作品をどう見せるかという工夫もこれからは極めて重要なのだなと。書には極めて興味があるものですから、今日また改めて一点一点が並んでいる広い壁面を見せていただき



土屋 禮一

ました。あの長い壁面、きれいでですね。

司会 最後に、全般的な座談会を通してのまとめのご挨拶をお願いいたします。

土屋事務局長 僕もこうやって何度か出させていた দিয়ে、毎回、皆さんの意義のあるお話を聞きながら、いい勉強をさせてもらっています。

我々も画壇の中では伝統的には百何年で、古いわけですけども、少し前に、イギリス王国の保守というようなことをテレビでやった時に、頑固一徹なイギリスの保守は、世の中の流れをいつも感じながら、したたかに水面下で取り入れていく。いろいろ決めたことでマイナスになったり、揺り戻しが来ないように、表面だけは保守を守り抜くというしたたかさでしようか。酸いも甘いも知ってきた保守哲学の偉大さをドキュメントでやっていて、これは日本人がどうしてもかなわないところだと言っております。

僕もかつては日本画の絵のことで考えていませんでしたけれども、こういう立場をいただいで、各科の先生方といういろいろなお話をさせていただくようになって、皆さんの人間関係力といえますか、

豊かな知恵をもらいながら、見事に先輩たちはこの日展を維持してこられたのだなということに改めて思うわけです。先人の知恵を大切に、ただつながるだけじゃなく、日展なりの伝統というものをもう一回我々みんなで勉強することだなと思います。

今回の収穫は、次の若い世代の広がりを感じたことでしたが、また同時に、審査する側の会員の方の仕事はこれでいいのか、自らを疑う姿勢もまた忘れてはいけない、そんなことを改めて思っています。

司会 それではこれで座談会を終わります。今日は長時間にわたり、どうもありがとうございました。



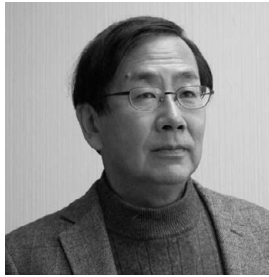
司会 中村 伸夫

(おわり)

コロナ禍で公募団体展の多くが中止になる中であって、日展が開催を決定したのはやはり社会の期待がそれだけ大きかったということであろう。日本画という重厚な伝統を誇る部門の外部審査員は私には正直なところいささか荷が重いという思いはあったが、審査主任の土屋禮一先生の名差配で何とかお役を果たすことができた。入選と各賞の選定に当たっては、日本画の固有の世界を深く追求した作品、新たな表現の可能性を切り開こうとしている作品という、二つの観点から判断することにしたのだが、開催後に改めて会場を見て回ると、やはり豊富なキャリアのある方々の作品は前者の観点から見ると、抜きん出たのは確かである。受賞作では文部科学大臣賞の河村源三の「夏の夕」は部分的に箔を用いた日本画ならではの平面性と装飾性を印象付けられる作品で、背後の色面に草花を重ねて描き、飛ぶ蝶の黒などを排した構成にこの画家の繊細にしてまたふくよかでもある感覚をうかがうことができた。

後者に関しては当然のことだが、意欲的なチャレンジャーである特選の方々の作品に見出すことができた。立花大聖の「返信のないメール」はスマホという今日的なテーマと古典的な描写、ウサギなどの断片的なイメージを挿入するという不可思議な幻想とが共存し、しかもアイデア倒れにならない技量の確かさを有しているところに惹かれた。天野澄子の「暮れゆく」は水溜りに燃えるような夕焼けの赤が映っているという、意表を突く色彩配置で、その発想の大胆さは注目に値する。伝統を踏まえるにせよ、革新を目指すにせよ、それを完成度の高い世界まで持っていく力が認められ、初経験の私にも大いにやり甲斐のある審査であった。

建 畠 哲 (たてはた あきら)



一九四七年京都に生まれる。早稲田大学文学部卒業。国立国際美術館長、京都市立芸術大学学長などを経て現在、多摩美術大学学長、埼玉県立近代美術館長。草間彌生美術館長を兼任。全国美術館会議会長。美術評論家。詩人。詩集「余白のランナー」で歴程新鋭賞、詩集「零度の犬」で高見順賞、詩集「死語のレッスン」で萩原朔太郎賞。文化庁創立五〇周年記念表彰。

コロナ禍のなかで行われた日展審査。出品数の減少が懸念されたが、昨年の一六七七点に対し、今年の搬入数は一六六三点とほとんど変わらない点数となった。日展を目指して制作に励む画家がいかに多いことか、と内心驚いた次第であった。また、ここに至るまで状況に振り回された関係者の方々の努力が報われたことを喜んだ。

小生、外部審査は今回で三回目となる。多少は慣れてきたものの、一六〇〇点を超す作品の審査は心身ともにこたえる作業である。どの作品も作者にとって一年の成果を問うもの。渾身の大作ばかりである。隣で審査された同じ外部審査員である、東京都美術館館長の真室佳武氏も真剣な面持ちで審査にあたっておられた。

審査は延べ六日間。一次審査で約半数に絞る。二次審査でさらに絞り、結果、入選が五九五点となった。ここまでで四日間を要し、保留作品を再審査するなど、何度目も作品を見ることとなる。五日目は特選審査。数点、強く推したい作品が落選となったが、多数決で厳正に決められた。この後、入選作品を展示し、日を置いて大臣賞、都知事賞、会員賞の選考が行われた。こちらは選考委員の人数も少なく、協議もスムーズで皆が納得のいく結果となった。

土方明司 (ひじかた めいじ)



今回の審査でも、人物画、風景画、静物画、それぞれ日展の定型スタイルが目立っていた。ものの見方、捉え方がステレオタイプな印象が否めない。日展が技術を重視することは大切であるが、もう少し画風に振幅があっても良いのではないだろうか。

現在、平塚市美術館館長代理。武蔵野美術大学客員教授。国際美術評論家連盟会員。著書に、『長谷川湊二郎』(求龍堂)、『画家たちの20歳の原点』(求龍堂)、『みずゑの魅力』(求龍堂)、『画家の詩 詩人の絵』(青幻舎)ほか。

審査員の一人としての感想

(第三科彫刻 外部審査員) 武田 厚

第三科彫刻の審査を終えて最も印象に残ったのは、一般入選から受賞作品の選考に至るまで極めて平等主義的方式に徹していたことである。投票にしろ挙手にしろ、各委員は誰彼に気遣うこともなく淡々と、かつスムーズに事の運びに順じ、多数決という結論の出し方についても、異論をはさむ者はほとんどなく進められていった。少なくとも私にはそのように感じられた。むしろ、だからと言って、結果的に、優秀と思える作品ばかりが見事に選ばれたかどうかについては審査員個々によって感想は異なるだろう。評価の視点が違えばそうなるのは当然。これは仕方のないことである。ただ、際立って質的落差を感じさせるものがなかったことは幸いと云わなければならない。したがって、強いて言えば、概ね平均点の取れそうな作品が救いあげられたということになるのか。裏返せば、作風の類型性を免れないことを覚悟の上での選択とも理解できる。それにしても、新鮮な個性を感じさせる作品もあったように思うが救えなかったのは残念だった。他方、いわゆる日展彫刻的と思える領域を大きく外れる作品が少々あったが、レベルの低過ぎる造作物で論外。

私自身、多くの審査員の一人ではないわけだが、審査に向けての思いはあった。当たり前の事だが、日展彫刻の現在、という新傾向の具象表現を期待させる作品を一点でも多く入選させ、受賞させることを、審査の中で一番に共有し、確認しておくことである。手法としては、実作の前で評価について論戦する、という方法もある。一般的なコンペティションではよく見かける風景だ。そんなことから日展彫刻に適った何らかの有益な毒性が発生しまいか、と私は期待しているのである。



武田 厚 (ただだ あつし)

一九四一年北海道生まれ。東京学芸大学美術科卒業。

山種美術館学芸員、北海道立近代美術館学芸部長、横浜美術館副館長を経て

現在、多摩美術大学客員教授。富山ガラス造形研究所顧問。

美術評論家 aica member international

改組新第七回日展審査に当たって

(第四科工芸美術 外部審査員) 内田 篤 呉

私は、日展の審査員を過去三回就任させていただいた。第一回目は改組新第二回展第一科日本画で、初日に山崎隆夫審査主任より審査に公平性、透明性を期するために、審査中の作品評価に影響を与える私語は厳禁、相談の禁止、席は毎日三回程度入れ替え、また日展理事二名の立会い、審査中のビデオ収録を実施するという内容の説明があった。この方針は第五回および第七回展第四科工芸美術においても春山文典審査主任から同じ説明があった。

本年度の工芸美術は、一般応募が六四五点で、昨年度比で三点の減少であった。一審、二審、三審を経て、最終的に四四九点の入選を決定した。特選は、審査員十九名が一点ずつ作品を推薦し、その作品を対象に投票を数度重ねて、得票数の上位から受賞作品を決定した。内閣総理大臣賞、東京都知事賞、日展会員賞は第四科理事五名と外部審査員二名を加えた七名で選考が行われた。はじめに大臣賞の選考を実施した。選考委員七名が大臣賞候補作品を選び投票を三回重ねた結果、投票数の多い「風通り抜ける岩壁」を受賞作品と決定した。同様に都知事賞、会員賞も投票によって決定した。

本稿で審査経過を詳述した理由は、公平で透明な審査が実施されたことを明記したいからである。審査中の私語や眩きは投票の誘導や票の動向に大きな影響を与えるから、日展で導入している審査中の私語や雑談、相談の禁止は極めて公平性、透明性のある審査方針と考えている。私は、常任理事を務めている日本工芸会主催の日本伝統工芸展においてもこの方針を導入するよう提案して、現在、同展において本審査方針を実施している。



内田 篤 呉 (うちだ とくご)

一九五二年東京生まれ。慶應義塾大学卒業。美学博士。九州大学、慶應義塾大学などの客員教授、非常勤講師、文化審議会等の各種委員を歴任。

現在、MOA美術館、箱根美術館館長。

日展五科書の審査に参加して

(第五科書 外部審査員) 神崎 充晴

改組新第一回展について二回目の参加。第一回目の試行錯誤した緊張感からは少し解放され、前回より積極的に関与できたように思う。当然ながら、公正公平を旨とする審査方法は貫かれ、回を重ねるごとに改善が加えられよう、じつにスムーズな進行であった。篆刻・調和体の二部門は審査員全員で最終審査まで通し、漢字と仮名は、まず、それぞれの専門に分かれて審査、最終的に全員の合意を得るという方法がとられた。これは、それぞれの専門性を重視、深く、広く理解する「眼識」を信頼しての措置と納得できる方策であった。しかしながら、応募総数八四三一点から一〇六九点に絞り込む作業は容易なことではなかった。連続九日間の鑑審査は正直言って疲れる。

私は、仮名を担当したわけであるが、とりわけ細字の帖・巻作品の良否の判断は、熟視する余裕がないために格別に難しかった。額作品も含んで、一審、二審、三審と、厳しい鑑査の関門を乗り越えた入選作は間違いなく日展に相応しいレベルに達していると言つてよい。その当落の境目の要素はというと、作品性、芸術性にあったのではない。古典の倣書作品、すなわち手習的と見られた作品は飾に掛けられた。結果的には、公募展の最高峰たる日展に展示されて恥ずかしい芸術性が備わった作品が選ばれた。

加えて、今回の第五科書の特筆すべき一大トピックは、内閣総理大臣賞に、調和体の作品(永守蒼穹)が選ばれたことにある。近時、読みやすく、親しみやすい調和体の普及に腐心している書道界の方針が強く影響を及ぼしたのではない。これは同時に、書壇あげての「つなごう日本の書道文化 ユネスコの無形文化遺産に」推進運動にも大きく寄与するであろう意義ある選考であろう。



神崎充晴(かんざき みつはる)

一九五一年兵庫県生まれ。東京教育大学(現、筑波大学)教育学部芸術学科書専攻卒業。五島美術館勤務を経て、現在、センチュリーミュージアム館長、センチュリー文化財団専務理事。専門分野は古筆学。

文化勲章受章者

奥田小由女



文化功労者・日本芸術院会員・日展理事長・現代工芸美術家協会理事長
昭和十一年十一月二十六日大阪府生まれ。昭和四十二年第十回日展初入選、同四十七年第四回日展特選、同四十九年第六回日展特選、同六十二年第二十回日展文部大臣賞、平成二年日本芸術院賞、同十年日本芸術院会員、同二十年文化功労者。

コロナ禍での

日展の取り組み

コロナ禍の折、日展は密を避けるため、審査員総会・オープニングパーティ・各科懇親会・開会式(テープカット)・「日展の日」を中止し、また、内覧会は入場者を限定して行い、授賞式は二部制により人数を分散させて開催いたしました。また、例年、会場内で行っている各種の作品解説会や講堂で行っている講演会・映像による解説会なども中止、また親子の体験型イベントの「わくわくワークショップ」も今回は中止いたしました。

その一方で、新しい試みとして

会場に來られない方々のために、会場内を動画で撮影し、日展のホームページで公開いたしました。(YouTube 日展公式チャンネルにて公開中)さらに、中止した「わくわくワークショップ」の特別編として、小・中・高校生向けに、作品をみて作家宛てに「手紙を書こう!」という企画を行いました。後日、その返事が作家から届くという企画です。



ホームページ公開動画の撮影風景



フェースシールド・マスクをのけた審査

大臣賞受賞作品制作意図

文部科学大臣賞 第一科（日本画）

河村 源三「夏の夕」



いつまでもモダンで、コンテンポラリーな作品であること。見たときに、いのちを見つめ、死を意識する、生き様を考える。そんな絵を夢見て描き続けています。この中の中にだけある、目だけでは見えない風景、こころの奥深いところを感じる日本画を描ければと制作しています。

東京都知事賞受賞作品制作意図

東京都知事賞 第一科（日本画）

岸野 圭作「草宴」



夏の暑い陽が傾く頃、人知れず種々混然と生い茂る草々がそれぞれの世界で息吹き、何処か安堵の表情を見せながら今を享受しているかの姿に、小さなものの集まりが静かで大きな幸福感につつまれてゆく、そんな一時に足を止めました。

日展会員賞受賞作品制作意図

日展会員賞 第一科（日本画）

池内 璋美「早春」



実際には存在しない風景です。人の手で飼われている二羽のフクロウを眺めていると、これらが自然の風景の中で自由に生きている姿が見えてきます。フクロウと重ね合わせ、思えばく風景を求めて季節と共にいろいろな所を歩きました。

文部科学大臣賞 第二科（洋画）

桑原 富一「ヒトリ」



ふと、後ろを振り返ると、鏡の中に自分だけが映っている。何故か見知らぬ人に思われ、鏡の中から見つめられているように感じる。住み慣れた部屋も見覚えのない場所に加え、不安を感じる。「ヒトリだなあ」と急に感じた。そんな部屋の空気感を出せればと思い制作した。

東京都知事賞 第二科（洋画）

丸山 勉「秋くるる」



「コロナ禍に於ける社会の移ろいと、しなやかに生きる個の関係性」というコンテキストを押しつけがましくなく、どう表現するかに悩みました。制作上では、青で進めていた背景の暗い感じが気になり、途中で生命力を示唆する赤に塗り替えた事が最も苦労しました。

日展会員賞 第二科（洋画）

小川 満章「窓辺にて」



強い光は実体を曖昧にしながら強い影をつくり、実体と影は同化し、影もそれ自体となつて、すべてが繋がっていきます。人を描くのは、空間を描くことだと考えています。人とはなんだろうかと問い、その答えに近づきたいと願い制作しました。

内閣総理大臣賞

第三科(彫刻)

楠元香代子「曙」



世界中に蔓延した新型コロナウイルスウィルスによって、生活スタイルが一変した二〇二〇年でしたが、毎朝、夜明け前にカーテンを開けると、雄大な桜島の方角から太陽が昇り、希望と活力を与えてくれます。
「曙」は、苦難の闇が早く終息することを願う気持ちを表現しました。

内閣総理大臣賞

第四科(工芸美術)

藤田 仁「風通り抜ける岩壁」



岩肌の連なる山々、見上げる岩壁の狭間に風が通り抜け、また小鳥が飛び交い、さえずりが聞こえる風景をテーマに、幾何形態的に簡素化した構成で岩壁の織りなしを表現した。素材は青く冷たい硬質感の鉄を用いて、素材表面の風合いに静かな情景・微かな動き・音などを込めました。

内閣総理大臣賞

第五科(書)

永守 蒼穹「岸本調和の句」



コロナ禍の日展、何を書くかと思案の中、平常を語る句を見る。日本紀・銀杏・神無月と馴染みの文言に安堵し、コロナのない日常を思う。銀杏の表情に意を込め、二字の大小を大胆にし、紀と無を右左に重めに呼応させて、何とか纏まりを求めた作。元気に筆を揮ったもの。

東京都知事賞

第三科(彫刻)

谷口 淳一「私は飛びたい」



爽やかな風を受け、未来に飛びたいとする姿を造形化しました。見えない風を表現する為に、髪の毛の流れとコスチュームに動きをつけようと考えましたが、思っていた以上に苦労しました。飛びたいとする決意は左手の指先に込めました。何度もやり直す中で形が見えてきました。

東京都知事賞

第四科(工芸美術)

山岸 大成「神々の座・那智」



白磁による自己の心象風景の表現を試みています。近年の主題は日本人の心の深淵にある大いなる存在への畏敬の姿に思いを馳せ、その対象たる大自然やそこにある祈りの場を造形の中に込めたいと思って制作しています。
磁器では極めて難しい直線による造形表現。

東京都知事賞

第五科(書)

井上 清雅「蘇東坡詩」



中国・東周後期から秦時代に及ぶ石刻大字のイメージを書作のモチーフとし、その安定した造形と重量感溢れる線質を尊重しつつも、青銅器(金属質)の旋律をも加味してみた。「墨氣」を念頭に白の響きに重点をおき、「黒と白の世界」に挑みました。

日展会員賞

第三科(彫刻)

櫻井 真理「やすらぎ」



美しい形を追究し続けて四十数年たちました。制作時の心の状態が作品に表れてしまうので、アトリエに入るときは心穏やかであるよう心がけています。どんな時代もたくましく、しなやかに生きていきたいという願いをこめて、この作品を制作しました。

日展会員賞

第四科(工芸美術)

待田 和宏「撓屈『瀝V』」



ここ数年、撓屈(どくくつ)シリーズとして制作している。撓屈あるいは撓曲は、たわめまげることの意味する。一滴の集積から始まる水の流れば、岩肌を伝う細い線となり、時には倒木を乗り越え光に飛び散りながら、やがて美しい沢水となり下流を目指す。

日展会員賞

第五科(書)

木村 通子「ゆく春」



しなやかで優雅な仮名の風趣を、額作品で現代的に表現したいと考え、縦書きの小字仮名で臨みました。文字の大小、字間、行の傾き、行の交響、全体の調和、余白の分量等々、全てに迷いながらの制作で、作意が勝ると自然な流れが滞り、大変苦心致しました。



(日本画) 金山裕子

還暦目前で美大受験を志し、院も含めて通った六年間。日展作家でもある諸先生方の作品に感嘆し、親子以上の歳の差がある学友たちの伸びやかさに助けられて、実に楽しい学びの日々でありました。幼い頃に父から聞いた故郷奄美の海の美しさや、色鮮やかな魚に想いを馳せながら各地の水族館を巡り、水槽に遊ぶ魚たちを写生したことが懐かしく、今回の入選が、父への追慕となったことを嬉しく思います。今後、父への追慕を忘れず、制作への夢を抱き続けたいと思っています。



(日本画) 前田 茜

山と田んぼに囲まれた土地で生まれ育ち、学校への登下校の道は田んぼのあぜ道でした。大学に入ってから、古里にはあまり帰っていませんでしたが、時勢により春に数ヶ月帰郷いたしました。久しぶりにみた春の山々の色づき、水田でゆれる稲は懐かしく美しく、絵の題材にしようと思ひ至りました。山など自然の移りかわりに強く心惹かれることに気づいたので、これからもそういうものを私なりに描いていけたらと思います。



(日本画) 宮城 亮太

私の制作テーマの一つ「力」について、今作『業』で強く意識しました。私の真の強さとは何かという内なる葛藤を凝縮し、力強く脈打つ血管や隆起する筋肉に、粗削りですが造形的な力強さを表現しました。しかし、会場で諸先生方の作品と比べますと、私の作品はまだまだ未熟で多くの反省が残りました。今後はこれを励みに力強く、制作に取り組んでゆきたいと思っています。



(洋画) 大串 悦一

初入選が叶い喜びと意欲が湧くこの頃です。パステル画で風景を描いています。パステルはそのまま画面に手が入られ、描きたい時にサッと描ける手軽さとフレスコ画のようなマットでやわらかな仕上がりが入り込んでいます。反面、タッチや線が単調になりやすいので色を重ね鋭いもので削ぎ落とし下地を出したり水で溶いて筆で描いたりします。会場に並ぶ密度の高い作品群の中に紛れ込んだ自分の絵を見ると足りないことばかりです。



(洋画) 東 裕子

時々、自分が酷く儂く不確かなものに思えて仕方ない時があります。止まれと願った刻も、忘れまいと誓った感情も、旬を終えれば二度と同じものとして私に寄り添ってはくれないと知るほど、未熟な自分を鼓舞しても、私自身の表現の可能性を求めて進まなくてはならないと思えてくるのです。限りあるものを私が私として作品に留めたくて。日展への挑戦はきっと私を成長させてくれると信じています。届かない日も限界だけは刻みたい。



(洋画) 山下 審也

高架下に「虎いち」という店があります。「阪神タイガース」の虎です。マスターにお願いし裏通りを描かせて頂きました。ここにはビール瓶ケース、樽や自転車等が点在しています。静寂した空間に愛着を感じ制作しました。この度は入選させて頂き大変嬉しいです。それを聞いて感激したマスターが店一杯おごってくれ、日展の知名度の高さに改めて感心しました。今後は足元に在る日常を大切に絵を描いていきたいと願っています。



初めての出品で緊張していましたが、初入選を頂くことができ大変嬉しいです。
人体を制作するときは、自分がモデルから感じた形、そのとき表現したいことを作品に表すという当たり前の感覚が難しく感じる事もあり、日々勉強です。
この度の入選を励みにさらに学んでいきたいと思っています。また、ご指導を頂いた先生、支えてくれた皆様に感謝を捧げます。

(彫刻) 吉原 ひなの



筑波大学大学院に進学したことを機に、作品発表の場として日展への出品を考えました。コロナ禍の大学では、夏頃までキャンパスに入らず、限られた期間での制作でした。しかし、制作できない時間も彫刻と対峙する時間になるということを知る、いい機会になったと感じています。
今回の作品は、精一杯いまの自分ができることを詰め込んだ作品になったと思います。この初心を忘れず、次の作品につながるよう、日々の制作活動に精進していきたいです。

(彫刻) 本多 史 弥



この度、入選することができ大変嬉しく思います。毎年、日展観覧を楽しみにしていた亡き父も、一緒に喜んでくれている事と思います。
今回は、そよ風によって季節の移ろいを感じている姿を表現しました。師の教えである構成・構築を念頭に、シンプルなポーズで存在感や重量感を出したいという思いで取り組みました。
今後は、日展入選者として恥じることの無い作品を発表していければと考えています。

(彫刻) 田 中 宏 典



この度の改組新第七回日展への入選を大変嬉しく思っております。入選作品の「蕾環」は、花の蕾からイメージを膨らませ、開花前の蕾の持つ秘めた力強さと生命力を表現しました。花入れとして花が生けるのではないかと思います。
これからも曲木による新しい木工芸の表現、造形を模索しながら、研鑽を積んでまいります。

(工芸美術) 亘 章 吾



以前住んでいた大分県竹田市は非常に自然豊かな地域です。
春の訪れを感じる土筆や筍。蛙の合唱から蟬の鳴き声へと移り変わる騒々しい夏。秋は山々が紅く萌えていき、冬には朝靄から浮かび上がる小山がみえる。そんな景色を少し作品にできたらと思い制作しました。
初出品での入選大変嬉しく思います。今後、自分がどういった作品を制作していくべきか。周囲を観察し、思考と試行を繰り返していきたいです。

(工芸美術) 長谷川 僚



十月。七宝焼の面白さを教えてくれた恩師の急な訃報を受けた数日後、日展初入選の吉報が届きました。悲しみと喜びで戸惑う私を支えて下さった先生方や七宝焼仲間の皆様に感謝します。この度の入選は私にとって大きな励みになりました。
七宝焼は金属とガラスと火の融合で様々な表情を見せる大変奥の深い分野です。その独特な美しさで伝えたい事を表現できるよう更に学び、挑戦を続けていきます。恩師に誓って。

(工芸美術) 田 中 コレコ



(書) 石田 美翠

この度、改組新第七回日展におきまして、初入選の栄を賜り、驚きと感激で胸一杯でございます。御指導頂きました諸先生方に感謝申し上げます。この作品は、ダイナミックで変化のある作品にと字形と流動美を意識して取り組みました。特に流動美に関しては、まだまだ未熟だったと思いますが、この初入選を機に今後の作品作りに努力致したいと思います。



(書) 秋山 翠聲

コロナ禍で書道展も中止となる中、日展に出品できただけでも有難いことと思っていました。しばしば素材として取り上げている更科源藏の詩には、北海道の風土性のようなものを感じ、心引かれます。高校教諭として部活動などで生徒の熱意に背中を押されることも多く、いい言葉、いい生徒との出会いが望外の初入選につながったものと思っています。大学入学の頃からお世話になり、昨年二月に亡くなった恩師にもいい報告ができました。



(書) 青木 鴻叡

この度は、歴史と伝統ある日展に初入選することができ心より光栄に思っております。どのようなことがあろうとも毎日筆を持つと自身に誓いを立て、この十数年間、一日も休まずに書いてきました。今回の入選は、これから更なる研鑽を積むようにとの叱咤激励のものと捉え、本当に有り難く思っております。これからも、深淵で崇高な書の世界で生きていけることに感謝しながら精進していきます。



(書) 吉田 味甘

この度は日展に初入選することができ、喜びと感謝の気持ちで一杯です。思うように書けず、常に模索しながらの制作でした。しかし、いつでも師が前向きに導いてくださり、やっとの思いで書き上げました。また、教員生活の中で物事に必死に打ち込む生徒の姿が大きなエネルギーとなり完成した作品です。最後になりましたが、ご指導頂いた恩師と、支えてくださった周囲の方々に感謝しながら、今後も作品制作に励んで参ります。



(書) 韓 孝伯

この度は改組新第七回日展におきまして、初入選の知らせを受け、大変な喜びを感じています。これもひとえに、私を公私共に二十年以上導いて下さいます恩師と、自分を支えてくださった日中両国の諸先輩方のおかげと感謝しています。作品は戦国古璽と小篆の朱文印を組み合わせたもので、もつと推敲せねばと思いました。今後この気持ちを忘れず古典の学習に励み、さらに努力をする覚悟であります。微力ながら日本と中国の文化交流に寄与できれば幸いです。



(書) 磯野 美佳

世の中のICT(情報通信技術)化は進んでおり、二〇四五年には「AI(人工知能)が人間の知能を超えるシンギュラリティ(技術的特異点)」がやってくると言われます。だからこそ字を書くなど、自らの頭と手で物を創り出したりすることが、これから大切になるでしょう。教員として、芸術に触れる楽しさを知る一人として、これからの日本、世界の担い手となる若い世代に、書のおもしろさを伝えていきたいです。

改組 新 第7回日展 入場者数（国立新美術館）

月 日	曜日	天 候	入場者数(人)	月 日	曜日	天 候	入場者数(人)	月 日	曜日	天 候	入場者数(人)
10/29	木	晴	540	11/7	土	曇一時雨	2,188	11/16	月	晴	2,506
10/30	金	晴	2,487	11/8	日	晴	2,664	11/17	火		休館日
10/31	土	晴	2,057	11/9	月	晴	2,163	11/18	水	晴	3,097
11/1	日	曇	1,742	11/10	火		休館日	11/19	木	晴	2,525
11/2	月	晴のち雨	1,538	11/11	水	晴	2,918	11/20	金	曇時々晴	2,158
11/3	火・祝	曇時々晴	2,131	11/12	木	曇	2,742	11/21	土	晴	2,787
11/4	水		休館日	11/13	金	晴	2,466	11/22	日	晴	3,953
11/5	木	晴	1,962	11/14	土	晴	2,770	入場者数52,105名（平均2,368名） ※10/29は会員、準会員及び今回展特選受賞者 限定の出陳者内覧会			
11/6	金	曇	1,777	11/15	日	晴	2,934				

改組 新 第7回日展 応募点数及び陳列点数（新入選数は入選数に含む）

	日 本 画	洋 画	彫 刻	工芸美術	書	合 計
応 募 点 数 (前年度比)	352 (-41)	1,663 (-14)	87 (-21)	645 (-3)	8,431 (-251)	11,178 (-330)
入 選 点 数 (新入選数)	154 (11)	595 (83)	66 (6)	449 (38)	1,069 (189)	2,333 (327)
無鑑査点数	131	123	156	129	146	685
陳 列 点 数	285	718	222	578	1,215	3,018

改組 新 第7回日展 巡回展（予定） 会期は変更することがあります

開催順	開催地	会 期	会 場	開 催 者
	東 京	2020年10月30日～11月22日	国 立 新 美 術 館	公益社団法人 日 展
1	京 都	12月19日～2021年1月15日	京 都 市 京 セ ラ 美 術 館	日展京都展実行委員会
2	名古屋	2021年1月27日～2月14日	愛知県美術館ギャラリー	日展名古屋展実行委員会 中日新聞社
3	大 阪	2月20日～3月21日	大 阪 市 立 美 術 館	日展大阪展実行委員会

富山展は諸般の事情により開催を中止とさせていただきます。

教えて、作家さん！
わくわくワークショップ 特別編
「手紙を書こう！」

改組新 第7回日展においては、新型コロナウイルス感染症対策のため、従来のワークショップが行えなかったため、「わくわくワークショップ-特別編-『手紙を書こう!』」という、小・中・高校生から気に入った作品の感想や質問をあつめ作家から返事が届くという企画を実施しました。手紙は223通にも及びました。

「圧倒」されました。全く詳しくもなく知識もない僕ですが、技法、構図、作品名共に素晴らしいと感じました。技法ではたとえば波にひび割れたような模様が泡?を表現されている感じ、構図は今その瞬間に水が落ちそうでまるで動いているように感じられました。作品名でしかわからない音ですが、交響という名前で常に波が満ちてはひいていく様子まで想像出来、とても鮮やかでした。自分は題名や作品名をつけることを苦手としています。俳句を良く作って応募していますが情景について良くまとめられません。素晴らしい作品をお作りになった谷野さんにアドバイスを頂けるとうれしいです。
綴史さん15歳



交響-瞬間

交響—すべてのものともものが交わり響きあって、波や風雲となって形が現れます。その様子を自身の心象として表現しました。貴君の鑑賞力の鋭さには感動しました。昨今の地球温暖化の加速によって、急激な災害を招き、未知のウイルス、感染症の温床となっています。人間の身勝手な行動に対する反省の意味も込めて。俳句も絵画も同じように思えます。感動を出来るだけどうシンプルに表現出来るかと考えます。私は石川県能登に生まれ育ちました。幼い頃から海は友達のように遊び場でしたので、自然と波の形を使うようになりました。俳句は得意ではありませんが、「群青の 波がまねかれ 里の夏」。
谷野吉冬

船の色やまちの古いようなところが好きです。うみみたいな水の色がすごくきれいです。どんなように色を塗ったんですか？色やものが本物に似てて塗り方がとてもいいです。朝のような塗り方が気に入りました。
ひかりさん7歳

イタリアの南の方にあるプーリア州モノポリという古い港町で、建物を古いまま残して使っている港を描いた絵です。漁師さんの朝は早く、ゆっくり朝ごはんを食べて港に出かけると、捕った魚は市場などにおさめ、みんな家に帰ってしまいます。網の手入れで残っている一艘の船と、迎えに来た女の子を入れて描きました。海の色はコバルトブルー、セルリアンブルーという青色を中心に、空色、緑や紫色なども使います。港町を描くようになったのは、まだ少し前からですが、川などの流れを見ているのは昔から好きでした。これからいろいろな絵を見てくださいね。
長谷川 侑



遅い朝、古い入江で

“奏春”という題名なので、きっと春を描いているのだと思うんですが、私には春を待っている冬に見えました。木の枝についている白いものは花を咲かせるつぼみで、後ろの背景も冬の雪景色に見えました。水面に木が写っている感じや花の色や葉の色がきれいで、心を引かれました。

私はあわい色や風景がある自然の感じが好きで、この作品を見たとき、すごくきれいだなと思いました。色があわくとうめい感のある中にも、影の所は濃く、濃淡があり、すてきだと思いました。もっと他の作品も見たいなと思いました。これからもすてきな作品をたくさん作って下さい。応援しています。

歌虹さん13歳



奏春

この作品の構想を考えていた時は、4月初旬の感染が拡大していた時期でした。外出もままならない状況で、制作者としてどのようなものを表現したら、出来たらと迷う時期でもありました。この作品に込めている願いは「再生」です。長く寒い冬であっても、春に向かって木々や植物達は芽を出す準備をしています。人間の世界は一つのウイルスで混乱をきたしているのですが、植物や動物は関係ありません。改めて自然の持つ力の大きさを知るきっかけでもありました。木々から淡い色をつけて芽が吹き出そうとしています。一足先に水芭蕉が花を咲かせています。(よく画面を見てもらっちゃいますね)季節と季節の変わり目に、生命が動き出す喜びのようなものを表現しようと思いました。

中出信昭

部屋に入った時、真っ先に目に入ってきたので選ばせて頂きました。収筆、起筆、構成など工夫されていて作品の前に立った時に奥に引き込まれるようでした。

私は呉昌碩の石鼓文を書いています。収筆の変化を研究しているのですが、筆が開かず最後にゆるんでしまうといったことがあります。収筆で工夫している所、意識している所はありますか？

作品制作において一番大切にしていることは何ですか？

来年の日展も楽しみにしています！

彩乃さん17歳

篆書の収筆についてですが、今、研究されている「呉昌碩の石鼓文」だけでなく、呉昌碩が臨学した原本の「石鼓文」(拓本)を合わせて学習されるといいと思います。また篆書の基本は小篆ですので、その代表的な「泰山刻石」などで篆書技法を研究されることをおすすめします。

私は、作品制作では常に線の命と存在感、作品の生命感が重要だと考えています。それは、書人間と同じように考えているからです。

新井光風



萬頃陂

馬のおしりについているネジがかわいいです。かわいいです。首にまいているのは何ですか。この人は何人ですか。傘はどこにさしているのですか。

宏太さん9歳

首に巻いているのは雲です。この人は月なのです。雲のえり巻のところから赤い傘をさし、空に向かっている途中で雨に降られている姿を表現しました。

宏太君も目標に向かってネジを巻いてガンバッテ下さい。

早川高師



雨だあ

●個人

青木晃子様 新井演子様 池田康子様 石崎喜江様 井上道守様 今村忠司様 奥田節子様 角井 博様 金子美和様 栗原直子様 黒田浩平様 近藤禎男様 佐川かおる様 高木京子様 田頭明子様 高田久信様 田中宏典様 土橋正彦様 鶴巻百合子様 中島裕子様 西田俊通様 西村友子様 藤田理恵子様 松岡庸子様 松本正之様 宮原和朗様 森島順子様

東 晋一郎様 飯田真未様 石崎國夫様 井谷善恵様 今田功一様 岩田 薫様 奥田卓三様 梶山純子様 兼重勇希様 呉 祐輔様 児玉安司様 坂本美賀子様 鈴木千壽様 高木寛史様 田頭益美様 竹本葉子様 谷本佳美様 土屋礼央様 寺岡宏高様 中原有三様 西村潤焔様 野田裕一様 堀 稲子様 松原香織様 宮島幸男様 村里 暁様

●法人・団体

株式会社 IDホールディングス様 医療法人社団 永寿会様 株式会社 大垣共立銀行様 株式会社 川端商会様 株式会社 玉蘭堂様 謙慎書道会様 ゴールデン文具 株式会社様 株式会社 靖雅堂夏目美術店様 公益社団法人 創玄書道会様 株式会社 高山草月堂様 株式会社 筑波銀行様 T&T パートナーズ法律事務所様 株式会社 テレビ長崎様 東洋額装 株式会社様 公益社団法人 日本書芸院様 一般財団法人 ビオトピア財団様 福井素鳳堂様 株式会社 便利堂様 有限会社 丸栄堂様 有限会社 みなせ筆本舗様 株式会社 ミライト・テクノロジーズ様 一般財団法人 桃園学園様 株式会社 谷中田美術様 株式会社 湯山春峰堂様 菱三印刷 株式会社様 株式会社 リンクス様 株式会社 和光様

表紙

右上

文部科学大臣賞

桑原富一「ヒトリ」

左上

文部科学大臣賞

河村源三「夏の夕」

右下

内閣総理大臣賞

永守蒼穹「岸本調和の句」

中下

内閣総理大臣賞

藤田 仁

「風通り抜ける岩壁」

左下

内閣総理大臣賞

楠元香代子「曙」

左の先生方が逝去されました。
謹んで哀悼の意を表します。

犀川 愛子先生(洋画・会員) 2・9・14

本山 唯雄先生(洋画・会員) 2・9・16

伊勢崎勝人先生(洋画・会員) 2・9・28

猪俣伊治郎先生(工芸・賞) 2・12・15

大井 錦亭先生(書・会員) 2・12・21

潮 隆雄先生(工芸・賞) 3・1・15

編集後記

昨秋コロナ禍の中、感染防止に万策が講じられ、改組新第七回日展が開催されました。鑑賞を楽しみにして下さっている方々に、観て頂けることは、出品者にとりまして大きな喜びです。

今号では、理事長、事務局長、各科審査主任により「コロナ禍における日展」というテーマで行われた座談会の内容を中心に編集しました。さらに外部審査員のご意見、新入選者の喜びの声、また「教えて、作家さん!」では、子供達の素朴な質問に対する作者の気持ち溢れる回答、そうした記事を掲載し、内容を充実させました。

多難な折こそ、委員一同一丸となり、多方面の皆様方にニュースを発信し続ける所存です。また、有効なワクチンの接種が始まることを願い、引き続き感染拡大防止を祈りたいと思います。

(水野)

編集委員 川田 恭子 水野 収

桑原 富一 平野 行雄

清家 悟 堤 直美

相武 常雄 月岡 裕二

中村 伸夫 西村 東軒